

FADO

14

Abril 1997

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL



月田秀子の昨日、今日、明日・・・

1月13日、14日の2日間、大阪・天野山金剛寺でのNHK・BS2の「古寺巡礼」のロケを終え、3日後に戦乱のアフガニスタンへ旅立つという同番組で一緒に写真家の長倉洋海氏と再会を期して、その夜、鶴橋で別れ、翌日、ポルトガルへと慌ただしく旅立ちました。両者の旅の質の隔たりに一抹の後ろめたさがあったことは否めません。

放映日は26日の夜、「旅人」の二人は日本にはいなかったのですが、日本にいなながらご覧になった方は、少ないのではないかと思います。どんな出来だったのか心配でリスボンから郷里の母に電話したところ、最後の観月台で歌ったファドがお寺の雰囲気によく合っていて良かったと言う母の弾んだ声を聞いて胸を撫で下ろした次第です。

帰国直後、たまたま大阪で講演中の五木寛之氏とお会いする機会があり、氏の主催する『論楽会』に今年はずっと出演することになりました。氏のファド、月田秀子への思い入れは相当なものようで、今年初めてのラジオ番組『五木寛之の夜』では、今年ファドの年にしたいと言うことで私の歌を流してくれたそうです。ファドを本格的に歌い始めて10年目の今年はいいい年になりそうだな、と思っているうちに、もう4月になろうとしています。長い冬に蒔いたファドの種は、今年やっと芽吹きこうとしています。



月田秀子のポルトガル紀行

-1997年1月リスボン編 その1-

リスボンの夜明けは遅い。7時をだいぶ回る頃、やつと空が白んでくると、ペンションの下の小鳥たちは待っていたように歌い出す。すずめがそして鶯が。庭の小枝にその姿はまだ見えない。7時半を過ぎるとにわか東の空が茜色にいろづく。ペンションを下ったところにあるカイシュ・ド・ソドレと向こう岸のカシリャスを結ぶ船がひきりなしにテージョ河を往来する。チンチン電車が、川沿いの道を軋ませて走る音が、昼間と違って心なしかせわしげに聞こえる。リスボン様のお目覚めだ。おまえの寝起きの顔を写真におさめようと5時ごろやつとまどろみ始めた私は、もう寝てなどいられない。車が慌ただしく石畳のみちをころげるように走る音の中、朝日に染まった河を、空を、ペンペン草の生えた古いレンガ色の屋根を、くちかけた白壁を、私は写真におさめる。鳴が、レンズの中をよぎってゆく。

「月田さん、今回はできるだけたくさん写真をとってきてください。」出発前にサンケイ企画の山本氏に念を押された。いつ頃からだろうか、写真を撮らなくなってしまったのは、1年間の滞在後、2年ぶりにこの町を訪れたとき、わたしは写真を撮ることにすっかり興味をなくしてしまっていた。というより、シャッターチャンスを見逃すまいとしゃかりきになっている自分が疎ましくなったのだと思う。この町を、心でしっかりと受け止めておきたいと思うようになった。この町に生きる人達の姿を、写真というフレームに閉じ込めるのではなく、私の人生のほんの短い間を彼等と共有したいと思うようになって。そこからかろうじて私の表現＝歌が生まれるような気がして。でもなかなかその肝心の歌、詩は沸いてこない。極力写真を撮ろうとカメラは常に持ち歩いたにも拘らず、正直いって写真を撮るのが苦痛だった。ポルトガルを、リスボンを知らない人達にせめてスライドで紹介するやさしさを私は持つことができなかった。今回の旅で出会った人達、出会った歌、私は沢山の宝物を心に抱いて帰国した。私の心は今、彼等への感謝の気持ちで膨れ上がっている。その思いだけは、これから私の歌を聞いてくれる人に伝えたい。

くもぐらのたわごと

イスラエルから見た日本

黒田 清

1月には2週間、イスラエルへ行ってきました。毎朝、7時か8時にホテルを出発、ディレクター、カメラ・クルー、コーディネーターとユダヤ人運転手、6人のチームがワゴンで移動して夕方まで撮影と取材。現地は暑さと寒さが交錯して、死海で海水浴をしたと思うと、そのあとは高原沙漠でヤッケを着ながら震えていたり、変化に富んだ旅でしたが、幸いへたりこむこともなく、無事帰ってきました。食事が規則的で、酒量も少なかったせいか、出かける前より健康になったようです。

私が以前にイスラエルへ行ったのは32年前のことです。イスラエルは1948年にできた国で、国民の8割以上はユダヤ人です。今年で建国50周年ということになります。建国直後に、イスラエルの建国によって追い出され、対立した形のアラブ諸国との間にパレスチナ戦争が起き、私が行った2年後には中東戦争が勃発。その後もパレスチナとの和平工作が続きながら、断続的に紛争がある国です。

古くから栄えた地域であるため、首都のエルサレムはユダヤ教徒にとっても、キリスト教信者にとっても、またイスラム教の信者にとっても聖地です。イデオロギーがなくなったといわれる現在から未来にかけて、民族と宗教が戦争の大きい要因といわれています。

私は、その戦争の影と宗教の重さを考えながら、イスラエルでの毎日を送っていました。ゴラン高原の国連停戦監視ゾーン、ガザ自治区、ネゲブ沙漠の軍事基地、郊外のキブツ、ガリラヤ湖畔のキリスト遺跡や、エルサレムにある「悲しみの道」(ヴィア・ロロダサ)ユダヤ人の聖なる場所「嘆きの壁」、イスラム教徒の聖域「岩のドーム」、そして虐殺を記憶するためのヤッド・バシェム(虐殺記念館)...

3000年にわたる愚かな戦争と濃密な宗教の遺跡、そしていまも群がる人々の群れの中で、私は日本の平和環境というものがいかに恵まれたものかを改めて思いました。

端的にいえば、私たちは中国、台湾、朝鮮半島などに、近くて遠い隣国を持っているが、侵略の意図さえ持たなければ、条約など結ぶことなしに友好は保障されるのです。安全を保障するのは特定の国との条約ではなく、違ったもの同士が共生するという精神です。大事なものはIQ(知能指数)ではなくEQ(情緒指数)なのです。そんなことを、ガザ自治区の難民の生活に接しながら思いました。

先日、NHK・BS2の「世界・わが心の旅」に黒田会長が出演されていました。人と人が傷つけ合い、殺し合うことの悲惨さを、彼の言葉、全身で私たちに伝えようとする姿に、熱い涙が流れました。上記の文は、黒田氏が主宰されている「怒友新聞2月号」から転載させていただきました。なお、黒田清氏の新刊『地を這うペン』が、1月、近代文芸社から刊行されました。<私のフリー・ジャーナリストとしての10年は、既成ジャーナリズムに対する挑戦と書いていい。そんな“モグラ精神”でやってきたが、それが既成ジャーナリストには、“モグラの歯ぎしり”に聞こえるかも知れないが、終生現役を目指す私にとってはそれをもって瞑すべきことである>(あとがきより)

近くて遠い関係

中西 健

日本とポルトガルとの関係は、鉄砲伝来によって大接近をみたのち、今日の日本人の意識の中では確かに遠い存在に遠いありません。1月後半の2週間、6年振り2度目のポルトガル行き機に、実は私も搭乗時間の長さ、時差の大きさに物理的な“遠さ”を感じたのは6年の加齢によるものかも知れない。今回のポルトガル行きは、かねてから月田さんと親しい在ポ日本人と引き合わせてもらうことを頼んでいた関係から、お誘いを受けて実現しました。

独断と偏見で申せば、歌手とファンも『近くて遠い関係』ではないでしょうか。ご紹介したポルトガルギターの池側忠氏と奥様、横

浜から参加された斎藤さんと私たち夫婦の6人は、この旅行中はそれぞれの感性、感度、感情を持った生活集団であった訳です。無意識の内にオープン意識で行動するメンバー、その一方でポルトガルの歩き方に不安を隠せない心理、からつきし生活力の乏しい生活者達を、月田さんはかなりのお荷物に感じながらも、私たちが30日の早朝リスボン空港の搭乗口に消えるまで、心配顔で見届けてくれました。滞在中の中頃は大西洋の空に満月の昇る頃でした。月は規則正しく満ち欠けを繰り返しても、人の言行は予測し難いものです。自分又は相手の心が欠ければ、いくら近くても遠い存在になってしまう脆さ、危うさを、同行メンバーとの関係の中にも、ましてや異国の街角で寝れ合う人達との間に再三感じたものです。

リスボンの夜についても少々お伝えしなければならぬでしょう。ここでは、やはりファディスタ月田秀子が主役です。私に裏事情の解ろう容も無いが、彼女の人脈、ネットワークの中からは然るべくしてピックアップされたファドレストランに夜な夜な(決してオーバーではない程多頻度で)出掛けることになる。行く先々では必ず旧知のファディスタやギタリストに出会うことになる。実にタイミングが良い、出演する店や時間帯などの情報が確かなのだろう。抱き合って頬ずりする挨拶が絵になっている。店内のお客はこんな光景を見逃さない。この時点で私たちがまでもが単なる日本人観光客ではなくなる。

バイロアルトの店のお客はその時々TPOの結果として来店したお客で、ファドを聴くこと以外にも目的がありそう、それに上品で紳士、淑女然としている。ステージもそんな雰囲気には合っている。それといのもステージ、客席ともに同じ“薄皮まんじゅう”の薄皮を食べているから。中身のあんこはつぶ、ねり、小豆、ウグイス豆...思いは様々、ファドはバックグラウンドミュージックではない。

それに比べ、金曜、土曜の夜のアルファマのお店は、地域のお馴染みさん、好き者ばかりが集まる“生”オケボックスの印象が強い。プロの演奏と歌、プロの歌の間、あいだに登場する客席の男、女、それぞれの心にずっしりと居座っている“定め”それを諦める事なく一杯で熱唱する。この雰囲気の中では、プロもアマも、上手、下手も関係なく、一人一人のスタイルが実に個性的であるにも拘わらず、同質の“気”で結ばれている。夜を徹して店内は一体になる。多分、ファドの精神性を理解し、その心を内面から振り絞れば、アマもプロも魅えて共感を呼ぶ、きっと一つしか無い表現そのものだからに違いない。私はアルファマのファドに感動した。こんな店には観光では決して行くことが出来ない。さすが月田さんの情報ルートなればこそと知っている。

ご報告が後になったが、月田さんはバイロアルトでもアルファマでもゲストとしてラストステージを飾ったことは言うまでもない。拍手鳴り止まず。このとき月田さんは近くても、まばゆく遠い存在。日本では未だ名声に恵まれないファド歌手月田秀子もポルトガルでの想像を越えた存在に驚くやら、感心するやら。

彼女は、今度のポルトガル行きでは、相異なる6人との道中で、従来の一人旅とは違ったプラス、マイナスがあったことと思う。勝手の違うこと、マイナスの方が多かったに違いない。しかし、生活を共にしたが故に、プラス、マイナスの両方から学ぶものがあつたに違いないと、私はいろんな負担を掛けたにもかかわらず、ひそかに悦に入っているのである。これからの彼女に更に幅と深みが増し、歌い手としては勿論のこと、プレーイングマネージャーとしても魅力や奮え、大いに支持者を魅了し、ファン層の開拓と蓄積に挑戦してもらいたいと心から願っている。

私事で恐縮ですが、このポルトガル行きのお誘いは、私にビジネス生活と訣別する時期を決断させ、ポルトガルを更に身近に引き寄せ、やがてポルトガルの生活者となることに気持ちを向かわせてくれました。月田さん、本当にありがとう。

cartas

●月田秀子ファドクラブジャーナルありがとうございました。月田さんの“味”がそこらじゅうに味付けされていて楽しく読ませていただきました。自分で感じていることを表現し、発信するという事は楽しいことですね。私たちの様な普通の生活をしている人間はなかなか自分を表現する機会も少ないし、小さいことで日常やっているのかわからないけれどほとんど受け入れられずに流されてしまい、きっと「よーしやるぞ」と思い切って少し大きめに表現したほうがいいのか、なんて思っています。小諸ユースホステルから「音」の素敵な発信を続けていきたいと思う今日この頃です。

BS2のロケはいかがでしたか。放送日がわかったらぜひ教えてください。楽しみにしています。「メウ・アモールーわが愛」は新しい歌ですね。聞きたいです。ライブの時のテープを聞いています。旅の話も聞かせてください。ワイン片手に…。野上さんのネパールへの旅にライブでお話を伺ったユースの仲間と一緒に参加させてもらうとのこと、そんな出会いも生まれて感謝しています。野上さん、池側さんにもお会いできる日を楽しみにしていますとお伝え下さい。夕日に映える冬の浅間山は見事です。紫がかかったローズ色。寒さを運んでくる妖精たちのしわざです。ほんの一瞬だからよけい美しく感じるのだと思います。西の空の夕日もみごとです。山から空のてっぺんまでいろいろな色が重なっています。今日もありがとう。生きていて良かった。そんな気持ちにさせてくれます。そのうちに暇をみつけて見にきて下さい。一番寒いときに。

(小諸ユースホステル・古屋 美佐子)

(大阪を真夜中に発って朝7時過ぎに小諸に着き、その時いたりんごの味忘れません。浅間山の凜とした空気、聞いてくださる人達の生き生きとした表情、その中でファドは生気を取り戻したような気がします。10月25日(土)そちらでのライブ楽しみにしております。皆さんも浅間山からの紅葉を見がてら小諸までお出掛けしてみませんか。)

●先日は素敵な時間をありがとうございました。時を経てあなたが自分自身の表現としてファドと取り組んでいることを、あるがままの姿として感じています。音楽や物造りについて新しい発見をしました。物造りの仕事をしながら、自分自身のアイデンティティー探しの進行形の真っ只中において、素直にポジティブなものを見据えることを同時に行うことが自分の仕事だと気が付いたことです。「物」＝「存在」、それは自分自身の光と影のようにも思えます。手紙を書くのへただから手紙らしくないですね。焼き物の仕事をしていると、その仕事、作品について周りからいろいろと言われますが、自分にとって大事なことは、仕事、作品そのものよりも、それを生み出そうとしているスピリットだと思っているんだけど、どうなのでしょう。より自分自身に近づくための旅の途中…。迷える旅人であるよりも素直な旅人でありたいと思います。素敵なポルトガルの旅を…。又、会える日が楽しみです。これから4月初旬頃まで桜をモチーフにした桜尽くしの仕事がはじまります。

(瀬戸市・三浦 順一)

(名古屋でのコンサートの時、25年ぶりくらいに再会した、大学時代の友人です。彼の影響で、コミュニケーション(共同体)に共感を覚え、そのことが、今日の「一人一人を尋ね歩く思い」歌い続ける私に繋がっているような気がします。彼は今、瀬戸で焼き物を焼いています。)

●昨年、ファン仲間である島田市の鈴木さんより月田さんのコンサートが、平成8年9月、松本市にて開催されることを教えてもらいました。松本市は隣県にあるので、この機会に続いて是非、甲府市でもコンサートを開催したいものと思い、さっそく月田さんをお願いをしたところ、幸い、快諾をいただきました。企画その他は、地元甲府で文化活動を積極的に続けておられる画家の設和先生との共催とし、多くの方々のご協力を得て、さらに5社の協賛も得て開催にこぎつけました。10月1日のそのコンサートでは、参加された方々に月田さんのファドをしみじみ堪能していただきました。その後、皆さんに感想をお尋ねすると大変喜んでおられ、多くの方から再演の依頼を受けるほどでした。そして、マスコミ関係12社に知らせた事により、さまざまな反響もあって、NHKのローカルテレビニュースでも時間をさいて取り上げていただきました。今年に入り、3月1日には諏訪市の伊藤さんも1ファンとして、同様に主催してコンサートを行いました。諏訪湖の夜景を一望できる素敵な会場に、月田さんも「諏訪湖はさながらリスボンのテージョ川」と賞賛しておられ、すばらしいコンサートになりました。

さて、全国におられる月田秀子ファド倶楽部の皆様に申し上げます。私たちがあなたにあなたが主催者となり、志と勇気をもって各地でコンサートを開催してみませんか。月田さんのファドには独特のSAUDADEが感じられ、必ずやライブに参加される方々に深い感動が伝わって行くことと信じます。

(山梨・磯野 茂)

(磯野さんのような方々のお陰で、少しずつ点が増えてきました。ライブもその点を結ぶように組むこともできるようになり、本当にありがたいことと感謝しています。知る人も少ないジャンルゆえに、ましてや知名度のない私ゆえに、聞いてくれる人を見つけ出すのは難しい事と思いますが、そんな感じでロコミで一歩ずつ歩いてゆきたいとおもいます。皆様のご理解とご協力に感謝します。)

●過日はお電話ありがとうございました。初めてお話ししたその時から、二人ともあまりにも自然におしゃべりしていたことが不思議な気が致します。甲府のステージでのおしゃべりを聴いて「何て純粋な方なんだろう…」と抱きしめたいような衝動に駆られ、又、この時世にちょっと辛すぎるほどの細やかな感受性を失わずに持ち合わせていらっしゃるように感じました。と、同時に、ちょっと前の自分も思いだしたり、いつの日かあまりにも辛すぎる日々に、自分の心を麻痺させる術を少しだけ身に付けてしまったかなあーと思える自分とちょっとだけ重ね合わせてみたり…。でもステージを拝見して歌とおしゃべりが進むにつれて、俗世から、違う世界に誘われていることに気がきました。桜の花の便りも好きだけど、一時でも現実を忘れられることはもっと素敵なことではなかったなあと思う。そんな一時を演出して下さるのも多分、アーティストの使命の一部分なのでしょうね。(媚びた駄洒落などでは現実には引き戻されるだけ)話は変わって、長倉洋海さんのお仕事はもう終わられたのでしょうか。私もあの方には興味を持っておりますので気になります。私が彼を知ったのはラジオの(NHKだったと思いますが)対談番組で、その時、強烈な印象でした。すぐに「フォトジャーナリストの目」という題だったと思いますが、本を買って読みました。月田さんが一緒にお仕事をされた後お話を聞きたいと思っています。

(東京・N・M美)

informação

●『ファド—わが心の歌—』と題して、NHKラジオ「人生読本」で3日間にわたっておしゃべりすることになりました。10分間一人ずつ黙々と(?)しゃべるなんて、歌うわけにもいかず、今から頭を痛めています。

放送日 3月24日、25日、26日

NHK第一放送：朝5時45分～55分/第二放送：夜9時30分～40分

●内容的には好評だった『きまぐれライブ』、昨年に引き続き今年も5月17日に開催することになりました。今回は、少しでもゆったり聴いていただけるよう150席限定とさせていただきます。ファド倶楽部優先で受け付けます。1月のリスポンの土産話もどきを混ぜながら構成しようと思っています。是非お出掛け下さい。バナナホールは最近改装していくらかきれいになりました。ご参考まで。詳細は同封のご案内で。

●大阪・西中島南方の『三裕の館(みゆうのやかた)』でのライブを毎月第一水曜日に定期的で開催することになりました。大地に根を張った大木のようなマスターの小川土風氏のかねてのラブコールに応えてのことです。お店の雰囲気はファドにぴったり合い、マイクなしの生音が心地よく、皆様にもきくと気に入っていただけることと思います。5000円でポルトガルワインとパンという取合わせでシンプルに、良心的にを信条に続けて行きたいと思えます。2月の時は、宣伝不足のせいかお客様は13名とちょっと寂しかったのですが、続けてゆくうちに少しずつ増えてゆく事を確信しています。地下鉄御堂筋線西中島南方駅、の一筋西側の道に面しています。(徒歩3分)

<月田秀子のスケジュール>

4月 2日(水) : 大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8:00	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
24日(木) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
25日(金) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
28日(月) : 大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00～3回ステージ(入れ替えなし)	☎506-253-0827 池側忠(P.G) 佐野健二(G)
5月 7日(水) : 大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8:00	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
17日(土) : 大阪/堂山町「バナナホール」 開場/6:00 開演/7:00 料金/6000円(1ドリンク・スナック付き)	☎06-345-5062(サンケイ企画)
19日(月) : 大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00～3回ステージ(入れ替えなし)	☎06-253-0827 池側忠(P.G) 佐野健二(G)
24日(土) : 岡山/衛生会館 「五木寛之論楽会」	☎06-311-0618 (スミイ ライフミュージアム)
26日(月) : 金沢/文教会館 「五木寛之論楽会」	☎上に同じ
28日(水) : 盛岡/盛岡劇場 「五木寛之論楽会」	☎上に同じ
29日(木) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
30日(金) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
6月 4日(水) : 大阪/西中島南方「三裕の館」 開演/8:00	☎06-304-1745 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
8日(日) : 福井/福井市文化会館	☎0776-61-3150 (ヌエストラ)
26日(木) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 野上圭三(G)
27日(金) : 京都/四条河原町・シャンソニエ「巴里野郎」 ①8:00 ②9:00 ③10:00 (入れ替えなし)	☎075-361-3535 池側忠(P.G) 河村真千子(P)
30日(月) : 大阪/心斎橋「アートクラブ」 ①8:00～3回ステージ(入れ替えなし)	☎06-253-0827 池側忠(P.G) 佐野健二(G)

<展覧会のご案内>

- ポルトガル在住の画家・武本比登志さんのポルトガルの絵の展覧会
5月8日～13日 大阪/なんば高島屋6階アートサロン

■編集後記

先日大阪のライブの時に仙台から聴きにきてくれた梅森さんの手書きの“胡桃”というミニコミ誌を読む、自分の思い、意見を伝えたいその一心で書いているその姿勢に感奮される感あり。いつものことながら結局自分で編集してしまった。やりたいという熱意のある人に会おうまでこれは仕方のないことなのかもしれない。せめて私の情熱の失せぬことを祈りながら。今号は中西健氏の硬派のタッチの一文、ありがとうございます。投稿お待ちしております。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ

<http://www.osk.threewebnet.or.jp/~fh/fh/tsuquida/tsuquida.htm>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル第14号
- 1997年 4月 1日発行 (季刊:年4回発行)
- 編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543 大阪市天王寺区味原町2-10 エヌケイビル 502号
- TEL&FAX 06-765-4808